

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
大学院学生研究
2016年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 文学研究科 フランス文学専攻		
研究代表者 (2017年3月現在のもの記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・フランス文学専攻・博士前期課程2年	布施 文菜 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部フランス文学科・教授	桑瀬 章二郎 印	
自然・人文・社会の別	人文	個人・共同の別	個人
研究課題	シュルレアリスムにおける恋人のイメージ —マックス・エルンスト『百頭女』を中心に—		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のもの記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・フランス文学専攻・博士前期課程2年	布施 文菜	
研究期間	2016 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 199,927円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

シュルレアリスムを代表する芸術家であり、今日広く浸透しているコラージュという手法の始祖であるマックス・エルンスト(Max Ernst, 1891-1976)の作品を中心に、この運動において徹底的に対象化され様々な手段を用いて表現された女性とその身体のイメージに迫る。

当初、シュルレアリスムは文学の範疇に留まる運動であったが、エルンストの作品はシュルレアリスト等に絶賛され、その運動の新たな地平を開く一助となった。

膨大な数を誇る彼の作品のうちとりわけ初期の、シュルレアリスムとの関係が濃密な時期の作品、そしてその関わり合いのなかで誕生した斬新で珍奇な「コラージュ・ロマン」の最初の作品であり、「女」のテーマを持つ『百頭女』を中心に取り上げる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 機械 } { 宗教 } { 犯罪 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

まず、シュルレアリスムという芸術運動に対して、私自身がこれまで研究を重ねてきた文学的な観点からのアプローチに加え、美学・美術史的な見地に立ち詳細な分析を行った。その結果、女性やその身体というテーマは芸術において普遍的であると再確認することができた。また、コラージュやその前身でありピカソ (Pablo Picasso, 1881-1973) やブラック (Georges Braque, 1882-1963) によって創始されたキュビスト等が好んだパピエ・コレといった近代芸術の手法を待たずとも、クラナハ (Lucas Cranach, 1472-1553) やモロー (Gustave Moreau, 1826-1898) といった画家等によって繰り返し描かれたサロメやユディトを主題とした作品等において、人体の切断が繰り返し描かれてきた歴史を理解した。その中で、シュルレアリスムのコラージュ、そして絵画の特異性を挙げるならば、一度切り出した人体の部位やあらゆる事物を、それまでとは全く異なった背景の上に置き、そして多くの場合更にその対象や環境に不似合いな別の物と共に貼り合わせることにある。それはまさしくシュルレアリスムが標榜したオートマティスム、即ち「偶然の出会い」の可視化の実現を意味する。エルンストが発明したコラージュは、雑誌の図像や古本の挿絵といった様々な紙面から恣意的に切り抜いた素材を貼り合わせ一枚の作品とする技法である。それ以前にキュビズムにおいて用いられたパピエ・コレとは一線を画し、そのデペイゼ(「…を日常から脱出させる」、「新鮮にする」、居心地を悪くさせる」といった意味を持つフランス語。その両義的な意味から、名詞化するとコラージュそのものを指す場合もある)によって新たな光景を展開させるコラージュはまさにシュルレアリスムが理想と仰いだ「ミシンと蝙蝠傘の解剖台の上での出会いのように美しい」のである。シュルレアリスムの中心的人物であり「法王」と称されるアンドレ・ブルトン (André Breton, 1896-1966) は、1924年に発表した「シュルレアリスム宣言」においてはその運動の範疇に絵画を想定していなかったものの、1928年には『シュルレアリスムと絵画』(*Le surréalisme et la peinture*, 1928) という絵画論を著すまでに至った。エルンストのコラージュがその契機のひとつとなったことは明白である。

エルンストの芸術家としての偉業の数々は枚挙に暇がない。手法の発明に限定しても、偶然性から生まれる美を表現するために、コラージュのみでなくフロッタージュ、グラッタージュを生み出した。そして彼の最大のシュルレアリストとしての功績は、コラージュ・ロマンの創作であろう。1929年に刊行された『百頭女』(*La femme 100 têtes*) を皮切りに、翌年には『カルメル修道会に入ろうとした少女の夢』(*Rêve d'une petite fille qui voulut entrer au Carmel*, 1930)、1934年には『慈善週間 または七大元素』(*Une semaine de bonté: ou, Les sept éléments capitaux*, 1934) が出版され、これらはエルンストの三大コラージュ・ロマンとして名を馳せている。

エルンストのコラージュ・ロマン処女作である『百頭女』がブルトンによって絶賛された事実は、彼がこの作品に向けた緒言から明らかとなる。「マックス・エルンストこそは、こんにちあるもっともみごとにとりつかれた頭脳」であり、この小説は「現代のこのうえもない絵本となるだろう」と予見された。

ブルトンによる賞賛からのみでなく、この作品を主題そのものからシュルレアリスムの作品であると位置づけることは可能であろう。美術史家ジェラルド・デュロゾワによる『百頭女』の分析から、前年に刊行されたブルトンの『ナジャ』(*Nadja*, 1928) と同様に、この作品にはシュルレアリスムの紋切り型である「女性とエロティシズムの称揚」という特徴が表れているとわかる。

しかしながら、そのシュルレアリスムの女性像の好例として、デュロゾワやヴェルナー・シュピースによって提案された、百頭女は女吸血鬼であるという読み替えは言語の分析に留まり、コラージュ画面と吸血鬼という姿の相関関係は強く読み取れない。そこで、キャプションと共にコラージュにも焦点を当て、百頭女の正体を探った。

『百頭女』をシュルレアリスムの女性像という観点から読み解くために、グザヴィエール・ゴーチエ (Xavière Gauthier, 1942-) の『シュルレアリスムと性』(*Surréalisme, et sexualité*, 1970) において提示されたこの運動における女性像の類型を手掛かりとした。続いて、とりわけシュルレアリスム芸術において断片化された人体や独立した部位の表象を分析し、様々なシュルレアリストの作品を対象とすることで、身体をしばしばオブジェとして扱ったこの芸術運動の理解の一助とする。身体の一部としては、眼球、手、乳房、足、頭及び首という5箇所を取り上げ、様々なシュルレアリスムの文学作品や絵画芸術を参照しながらその「不気味さ」をフロイトの論述に則って分析した。

続いて、エルンストの『百頭女』に登場する女性像、そして男性像を明確にした上で、反復される複数のモチーフを取り上げ、複数の視点から物語を読解した。第一に機械のモチーフ、第二に宗教的・神話的モチーフ、そして第三に犯罪のモチーフを分析し、この物語が逆転した神話、悪魔的な聖書であることを確認した。また、第一章で確認したゴーチエによるシュルレアリスムの女性像が『百頭女』にも見られるか検討した。

機械のモチーフについては、未来派、そしてダダを受け継いだシュルレアリスムにおいて見られる機械装置や円環の永久運動の意味を考察した上で、『百頭女』に頻りに登場するそれらのイメージと照合する。

第二の宗教的・神話的モチーフは、反キリスト教的と言われるシュルレアリスム運動と同様に、キリスト教をパロディ化する『百頭女』から、該当箇所を見つけ出し聖書の物語と照らし合わせた。

研究成果の概要 つづき

『百頭女』の物語を奇怪かつ退廃的に彩る最大の要素は、度々起こる流血、殺人、そして死の場面である。随所に見られる犯罪のイメージは、百頭女が死を招く存在であることを強調しているのだ。その存在が、聖女マリアであると同時に人々の命を永遠の渴望と闇の中へ引きずり込む吸血鬼であることをシュピース等研究者の論文や様々な吸血鬼と芸術の関係を記した著作を論拠とし、百頭女は吸血鬼であると結論づけた。

一連の考察から、『百頭女』における女性像がシュルレアリスムの理想の女性像たる悪魔的な妖婦、すなわち女吸血鬼であることを明らかにした。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 修士論文の提出。